

歴史的寺院空間における美術文化の創出と発信

～岐阜アートフォーラムの活動報告～

Creation and dispatch of fine-arts culture in historical temple space
The activity report of the Gifu art forum

小笠原宣*・衣笠文彦**・草野次郎***・佐部利典彦****・二村元子*****・
奥村晃史*****・堀祥子*****・佐藤昌宏*****・河西栄二*****

OGASAWARA Nobu, KINUGASA Fumihiko, KUSANO Jiro, SABURI Norihiko,
FUTAMURA Motoko, OKUMURA Akifumi, HORI Sachiko,
SATO Masahiro and KASAI Eiji

キーワード：アートフォーラム，芸術文化，まちづくり，震災復興，寺院

I はじめに

1 概要

近年，芸術活動の可能性を求めてあらゆる試みがなされている。時代とともにその表現形態は変貌し，ありとあらゆる事象がその手段手法となりうる状況である。本稿では，「寺院空間における美術文化の創出と発信」をタイトルとして掲げ，筆者らによる「岐阜アートフォーラム」の活動を材料として，時代や表現形態に既定されることなく普遍的に存在するはずの芸術活動の意味とその魅力を明確にするべく考察を進めて行きたい。

2006年から活動を開始したアートフォーラムの活動も，その時々々の社会環境，人的交流，地域とのかかわりなどを通して変化し続けている。

この活動において，街中の歴史ある寺院空間を舞台として，芸術に何らかの形で携わる筆者らが，美術や音楽などの芸術活動を発信し，表現者・鑑賞者という垣根を超えて，市民とともに文化や芸術を育んでいこうとするものである。その意味をこめて活動名をフォーラム（集まる場所）とした。

※ 画家，上宮寺住職

※※ 岐阜聖徳学園大学短期大学部非常勤講師

※※※ 兵庫教育大学大学院芸術系

※※※※ 画家

※※※※※ 彫刻家

※※※※※※ 名古屋女子大学文学部児童教育学科

※※※※※※※ 岐阜大学教育学部美術教育講座

2 活動の経緯

2006年9月，衣笠文彦¹⁾が3年に及ぶローマ滞在を終え帰国した際，美術仲間の上宮寺²⁾住職小笠原宣³⁾より寺院での彫刻個展開催の提案があった。それがこの活動の萌芽となり，アートフォーラムが開催される。その折に次回の開催を望む声が聞かれ，さらに作曲家草野次郎⁴⁾も加わり，第2回にむけ岐阜アートフォーラム実行委員会⁵⁾を組織することになる。

すでに2002年，地元で活動する美術仲間による「岐阜・内モンゴル美術展」⁶⁾を開催した際の実行委員からも寺院での活動の可能性を求める声もあり下地は整っていたといえよう。

以後，ほぼ2年に一度のペースで開催され，今日に至る。当然のことながら，より良い会の開催に向け，定期的に実行委員会の会合が開かれる。その際には，委員各自の芸術に対する信念及び時代感覚を元に，時に熱く激しく議論を戦わせることも，このフォーラムの存在意義であるといえよう。

2006年に萌芽を見たこの活動は2012年10月に第4回を迎えるに至った。以下の通りである。

・第1回岐阜アートフォーラム

～時空の住処（すみか）～

衣笠文彦彫刻展2006年10月28日（土）

・第2回岐阜アートフォーラム

～時空の住処～

四人の芸術家による表現会（ひょうげんえ）

2008年10月25日 (土)

- 第3回岐阜アートフォーラム
～時空の住処～
アートコンサート 2010年10月3日 (日)
- 「来て着て聴いてお寺でチャチャチャ」
Tシャツ染色ワークショップ
2011年7月25日 (月), 26日 (火)
- 第4回岐阜アートフォーラム
～時空の住処～
響きあう心 金谷昌治チェロコンサート
2012年10月14日 (日)

いずれも寺院空間を舞台とし、子どもから大人までの地域住民の参加を想定した企画である。また、この企画に賛同をいただいた各種公的機関、団体、企業、個人から後援、協賛を多数いただいたことを付け加えておく。

各回の活動は実践報告として章にまとめ後述する。

3 活動の意義, 目的

かつて江戸時代に寺子屋というものがあつた。民間の私塾である。中世の寺院教育が起源とも言われている。あるいは門前町という名称も今に至るまで残されている。寺院を基点に町が発展してきた証左であろう。そこに見られるように、日本の社会環境整備の中心に寺院があつたことは疑いのないところである。特に文化、芸術、教育などの分野で中心的役割を果たしてきたといえる。

そのような歴史的背景を踏まえ、美術家としての活動の展開を寺院空間の可能性に触発された衣笠は、美術仲間として長年交流がある上宮寺の住職であり画家でもある小笠原と、例えば昔の寺子屋のような寺院空間の活用を模索していた。

本稿冒頭に述べたように、美術の発信起点はすでに美術館、ギャラリーという既存の施設を飛び越え、あらゆる可能性が許容されている。音楽文化においては、口頭継承から楽譜へ、そして音そのものを音として記録するレコード技術に見られるように、記録媒体及びコンピューターなど装置の急速な発達を受け、さまざまな

表現の可能性を探っているところであろう。

今日、そのあまりにも急速な時代の変化の奔流に踊らされ、それらの表現活動は概念の大海に呑まれ、無限の可能性の平原に埋没しつつあるように思われる。

そこで筆者らは、もう一度人間の営みの中で地に足を付けた表現形態を取り戻そうと試みた。懐古趣味としてではなく、本来的に日本の社会システムの中心的存在である寺院、その空間を現代に活用する方策を探った結果がこのアートフォーラムという活動だったのである。

ここでは専門的な宗教関係の議論は別稿にゆずるとして、地域社会の中心的存在としての寺院は、現代社会においてもなお、大人から子どもまで一般的な市民にも親しみ深く、心地よい緊張感をもって非日常を体感する舞台とも言える。その空間を得ての美術表現、時間を共有した音楽表現を展開していくことは、タイトルにあるように、「寺院空間における美術文化の創出と発信」となりうるのではないだろうか。

(I-1, 2, 衣笠, 二村, 3, 衣笠)

II 実践1

「第1回岐阜アートフォーラム 衣笠文彦彫刻展」

1 概要

日時：2006年10月28日 (土)
会場：上宮寺 (本堂・庫裏・茶室・庭)
主催：岐阜アートフォーラム実行委員会、
企画・衣笠文彦

(1) はじめに

I章でも触れたが、衣笠が3年間のローマ滞在を終え帰国した際に企画された展覧会である。



写真1 衣笠文彦彫刻展 ブロンズ作品を茶室で展示

ローマでの2回の個展（“ZEN ate ROMA” 2004 ローマ，“ROMA” 2006 ローマ Studio DR）（写真2）において展示された作品を持ち帰り，帰国作品展（写真1）とした。

（2）寺院への美術作品展示

衣笠が美術鑄造の本場と目されるイタリアでブロンズ作品を制作し持ち帰った。今回展示場所となったのは，通常仏教活動のために整備された空間であり，信者が参拝する本堂や，訪問客が談笑したりするための庫裏であるので，当然ながら彫刻作品を展示するためのものではない。一般的には美術作品を展示するためには，美術館や画廊といった，あらかじめ意図された空間を使用するものである。あまりにも広大な伝統的な日本建築空間を持つ寺院では，小ぶりの作品群の展示に工夫を必要とした。そこで衣笠は色彩の強い布を用いて寺院空間を緊張感のある非日常へと変容させ，寺院の本堂，庫裏，茶室などに，それらの作品を展示した。

2 考察

展示では，あえて日常の空間に非日常とも言える彫刻作品を設置するという試みである。しかも作品は作者が日本人とはいえイタリアでの生活から生まれたものであり，現地の職人によるブロンズ鑄造作品である。展示に当たっては，作品をいきなり畳の上に置くということではなく，あえて色彩の強い布を作品の下に敷くことにより，和の空間と洋の作品の調和を図るべく展示を演出する工夫を凝らした。それが功を奏して，鑑賞者には違和感を覚えない，むしろ斬新な空間であるとの評価を受けた。

この展覧会は，新たな芸術表現を考え得るきっかけとなった。洋の東西を，時代の古今を問わず，美の追求にはその本質を誤らない限り，無限の可能性のあることを確信することができた。

3 課題

今回注目すべきところは，異文化及び異空間のぶつかりあいによる，新しい価値観の創出といえる。写真1，2に見られるように，その環境空間から受けるイメージはまったく違うもの

である。もともと寺院空間には仏像仏具等，ブロンズ製品は付き物であり，素材的な意味では違和感はないといえよう。とはいえ展示作品は現代彫刻である。その作品がその空間に受け入れられるかどうか，が課題になる展示でもあった。

4 成果

彫刻作品とは単体で存在するものではなく，その周りの空間と影響しあってこそ，存在を確かに行うことができると考えられる。また展示方法も表現の一部といえるだろう。その意味では展示は，東西の空間を，時間を超えた新たな可能性を探るものであった。また直線や曲面で構成された作品は，非常に構築的で，リズム感をもっていた。そんな抽象化された作品群は，日本建築の，ある意味抽象的な空間と調和して，洗練されたイメージを与えた。それによって，鑑賞者に，より自由に思考する余地を与えたとと言えるだろう。

展覧会は，わずか1日だけの展示であった。またDMによって通知された者のみが，鑑賞に訪れた。日常，寺院に足を運ばない者にとっては，少々緊張感をもって訪れることになったが，その緊張感と，通常とは異なる展示空間に興奮を覚えた。

寺院が今後，美術館や画廊空間以外での表現の場を広げる作家の発信拠点となり，また，寺院を訪れる機会の少ない人にも垣根を低くして，多くの人々が集まる中心地になることを期待したい。

この寺院空間を活用し，新たな文化芸術を発信しようという試みは，さらに音楽，映像など表現手段も広げ，「時空の住処（すみか）」とタ



写真2 ローマでの個展風景
一番手前が写真1と同じ作品

イトルが加わり、芸術表現の新しい指針が見えてきた。また地域住民、及び子どもたちも参加したワークショップにも活動が展開していった。振り返って見ると、第1回の企画として、その後の活動の基盤を確立できたことは評価できるのではないだろうか。

(Ⅱ-1・2・3 衣笠, 4 二村)

Ⅲ 実践2

「第2回岐阜アートフォーラム～時空の住処～
四人の芸術家による表現会 (ひょうげんえ)」

1 概要

チェロコンサート日時：2008年10月25日 (土)
18：30開演 会場：上宮寺 (本堂)

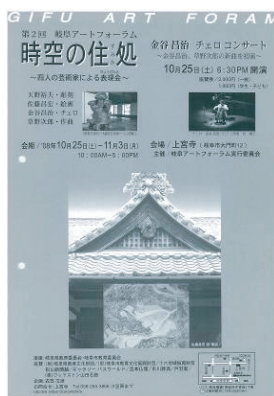


写真3 第2回ポスター

コンサート出演・担当：チェロ演奏・金谷昌治⁷⁾、作曲・草野次郎、ピアノ伴奏・谷峰子⁸⁾、司会・堀祥子 展覧会日時：2008年10月25日 (土)～11月3日 (月) 10：00～17：00 会場：上宮寺 (庫裏、茶室) 担当：彫刻・天野裕

夫⁹⁾、絵画・佐藤昌宏¹⁰⁾

主催：岐阜アートフォーラム実行委員会、
後援：岐阜県教育委員会、岐阜市教育委員会、
企画：衣笠文彦

(1) はじめに

第2回目となる本実践は、それぞれのジャンルで活躍している4人の芸術家によって、岐阜の歴史的寺院である上宮寺において、彫刻と絵画のコラボレーション展と同時開催のチェロコンサートにより構成されている。

(2) コラボレーション展

展覧会は、彫刻家・天野裕夫と、画家・佐藤昌宏が、それぞれの作品と共に、天野のテラコッタの新作に、佐藤が絵を描いた共同作品も展示された。

展示は庫裏や茶室に、2人の作品を混在させて展示した。天野は庫裏の畳を利用して展示台

とした。また、佐藤は屏風形式の絵画や庫裏の天井画 (写真4) を試みるなど、寺院の空間を意識した展示を行った。鑑賞者も靴を脱ぎ、畳に寝転びながら鑑賞したり、茶室では静かな時間と空間を楽しんだりした。

(3) チェロコンサート

コンサートは展覧会の初日に上宮寺の本堂で実践した。草野がコンサートのために、「岐阜」をイメージして作曲した「木曾幻想」などを、金谷がチェロを、谷がピアノで演奏した (写真5)。

2 考察

(1) 寺院への美術作品展示

上宮寺の座敷は大正期に建築されたもので、書院造りの様式が取り入れられた落ち着いたのある空間である。そこに2006年10月、ギャラリーパsworld (岐阜市) で展示した2人の共同制作 (写真6) に加え、天野の彫刻、佐藤の絵画を展示した。

庫裏玄関の天井には龍図を取り付けた (写真4)。正面に彫刻 (天野制作、彩色は佐藤担当) とその背景に屏風絵 (佐藤制作) を展示した。次の間には、虎の衝立図 (佐藤制作)、奥の間には、彫刻 (天野制作) を展示、別棟の茶室の床の間に、女人図 (佐藤制作) を掛けた。

絵画・彫刻などの造形作品は、画廊や美術館などに展示されるのが常だが、有機的で異形の作品群は、それぞれが主張しつつも、寺の空間に収まっていた。



写真4 庫裏玄関の天井画「龍図」佐藤昌宏

(2) 演奏会の構成, 作曲コンセプト

第2回岐阜アートフォーラムでは、初めての試みとして美術作品と音楽作品の共同展示・発表会という形が実現した。その音楽担当として草野は、空間芸術としての美術作品と時間芸術としての音楽作品の特徴や長所を犠牲にすることなく、まずは互いが自然な状態でそれぞれの表現が確立されるべきと考えた。そして鑑賞者にはその中で両者の表現意図を自由に感受し、出来得れば両者の融合した芸術鑑賞を体験してほしいとの願望があった。

よって具体的な試みとして、音楽側では中心軸として金谷昌治チェロコンサートを催し、美術側ではその演奏会の前後の時間を利用して、聴衆は上宮寺内の空間に点在する作品を自由に鑑賞するという全体のコンセプトが設定された。このコンサートはクラシック名曲の小品を中心としたプログラムで構成した。その中に草野の作品《木曾幻想「木曾節」の主題によるパラフレーズ》を組み入れた。この曲は演奏会のために書いたものである。その理由は、この岐阜アートフォーラムの企画者の1人でもある彫刻家の衣笠とチェリストの金谷、そして草野の3人が学生のころ木曾地方にしばしば赴き、美術と音楽を組み合わせた芸術的発信を将来に向けて考えていたことから、その発想を得て初の試みへのオマージュとして書き上げた。なお、副題の“パラフレーズ”とは、原曲の旋律やリズム、和声等々の要素を自由に変奏、再構成することによって、新たな表現ベクトルを作り上げる変奏曲の広義の意である。特にこの曲においては「幻想的」な趣を主としている。



写真5 第2回コンサート風景

(3) チェロコンサートについて

まずは初の試みとして、音楽（チェロコンサート）を中心軸としたことによって、聴衆が演奏終了後にどの程度美術作品鑑賞に踏み込んでいくのが未知数であった。しかし運営側での丁寧な誘導や上宮寺自体の芸術的密度の濃い雰囲気、来訪者の多くは演奏会の余韻の中で美術作品を享受していた。よって今回の会の意図は概ね達成されたと言えるが、課題として音楽作品と美術作品のさらなる緊密な結びつきに関しては、次回のアートフォーラムにその考えを引き継いでいくこととした。



写真6 天野・佐藤の共同作品
天野裕夫（彫刻）佐藤昌宏（絵画）

3 課題

寺における作品発表は、美術館等とは違って新鮮に感じたが、展示会場となった書院はそれ自体が完結した空間であった。

作品を設置する位置も、設計段階から想定されているため、それにうまく取り込まれて、まともすぎたことを反省している。既成の概念にとらわれずに、空間をもっと自由に使えればと感じた。

次回からは、江戸期の曾我蕭白や長澤芦雪などの奔放な表現を参考にできればと思う。その意味で、天井に設置した龍図は成功したと思うが、天井が低すぎて圧迫感があった。本堂のような、高さのある空間が望ましかった。

また当初から音楽との融合は意識していなかつ

た。それを目指すなら、音楽や絵画作品が、どちらか先あって、それに触発されて制作する必要があるのではないかと感じた。

時間やリズムを視覚化した抽象的な表現ならともかく、形が主張してくる具象的な造形作品の場合は、少なくとも作品の配置された空間で演奏するなどの工夫が必要と思われた。

4 成果

実質的な意味でアートフォーラムの活動の出発点となった今回は、初めての試みとして、長期間の美術展示やコンサートを企画、実施した。「地域に発信する」という、ひとつのねらいが形となったといえよう。また、地域住民やアーティストが、スタッフとして協力し合うことで、人が集まるといふ寺院本来の役割を再確認すると共に、芸術を中心とした、文化の発信の仕方を試すことができた。

また4人の芸術家が、寺院という空間を生かして、質の高い表現を地域の方に見せることができた。今後は美術と音楽の連携の点において、更なる議論、考慮、実施の検討の努力を重ねていきたい。(Ⅲ-1・4二村, 2(1)・3佐藤, 2(2)・(3)草野)

IV 実践3

「第3回岐阜アートフォーラム～時空の住処～アートコンサート」

1 概要

アートコンサート日時：2010年10月3日(日)

18:30開演

会場：上宮寺(本堂)

アートコンサート出演・担当：ヴァイオリン・波多野有紀¹¹⁾、ピアノ伴奏・廣田俊治¹²⁾、絵画・小笠原宣、映像・杉山弦¹³⁾、総合プロデュース・作曲・草野次郎、司会・堀祥子

同時開催彫刻展名称：河西栄二¹⁴⁾ 彫刻展～木の中に潜む、力強い生命感の探究～

日時：2010年10月3日(日)～10日(日)

10:00～17:00

会場：上宮寺(境内、庫裏、茶室)

主催：岐阜アートフォーラム実行委員会、

後援：岐阜市教育委員会、寺院を活かしたまち

づくり団体協議会、全体企画：衣笠文彦

(1) はじめに

第3回目となる本実践は、音楽と絵画によるアートコンサートと同時開催の彫刻展により構成されている。

アートコンサートは、音楽と美術(映像)の融合した表現形態であり、今までの活動が発展したものである。草野が作曲・編曲・構成した音楽をライブで表現し、映像とのシンクロナイズを試みた。

草野は、小笠原の絵画作品からドビュッシーの音楽を連想し、そのイメージを基に作曲・編曲・構成を行った。上宮寺の本堂に特設のスクリーンを設け、杉山が映像化した小笠原の絵画を映し出し、ヴァイオリニスト波多野が映像プロジェクトとの同時ライブ(写真8)を行った。本堂は200人近い観客で埋め尽くされた。

同時開催として、河西の人体をモチーフとした木彫作品大小13点を、境内中央にある樹齢500年の大イチョウの周りや庫裏、茶席に展示した。

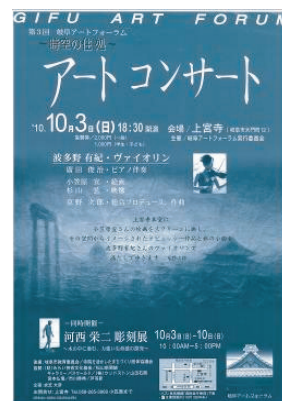


写真7 第3回ポスター



写真8 アートコンサート風景

ドビュッシーの曲「沈める寺」と小笠原宣の原画「ローマ京都の落日」を題材とした映像作品のコラボ
波多野有紀(ヴァイオリン), 廣田俊治(ピアノ伴奏)

2 考察

(1) アートコンサートの絵画、映像について

本来絵画は、根源的時間・作家の歴史的背景を必ず含有している。鑑賞者の絵画との出会いはこの時間を共有することでより深く充実した

ものになる。小笠原が採用したプランは、一定時間『音楽を聴く』多くの聴衆と、映像化された『絵画を観る』ことを同じ空間で共有するコンサートを企画することだった。

映像を媒体とする音楽と絵画の同空間表現を目指すにあたり、映像を媒体とする展示方法が有効な選択枝となる。まず、小笠原の一連の絵画表現(写真9)を映像化するにあたり、自選の作品を暫定的な映像化し、それを音楽家に付託し、音楽による絵画の聴覚化をはかった。このプロセスを経ることで、映像作家による映像がより動的な芸術表現へと昇華される可能性が広がることを期待した。ここに映像を媒体とした、絵画と音楽の同時空間芸術が創出される。

現在、絵画の映像化には多様な手法が考えられる。プロジェクターやスクリーンの選択で無限の可能性を生む。映像を担当した若手の映像作家杉山による、画像編集ソフトを駆使したコンテンポラリーな表現には、大いに啓発されることになった。

実験の場に、小笠原が住職を勤める上宮寺本堂を選んだ。自身にとって真に根源的時間を有する処であり、絵画が誕生した聖地でもあったことは実に意義深い。音楽を担当していただいた草野とは、旧知の同世代であり芸術の時代背景をより深く共有化することができた。



写真9 「ローマ 京都の落日」小笠原宣

この作品がドビュッシーの曲「沈める寺」の映像に用いられた。

(2) アートコンサートの音楽や演奏について

今回の試みは、前回の課題として残されていた「美術作品」と「音楽作品」とのさらなる緊密な結びつきをテーマとした。岐阜アートフォーラムの主催者で上宮寺の住職、そして画家である小笠原の作品を中心に取り上げて、その作品

からイメージする音楽を氏の絵画に結び付け音楽と一体化する試みを行った。音楽は、草野が小笠原の作品全体から浮かび上がる雰囲気やドビュッシーの響きや音色パレット¹⁵⁾に近似性を感じ、この作曲家の作品を音楽テーマとすることに決定した。

小笠原作品をいかにドビュッシーの音楽と一体化させるかに関しては、小笠原の絵画を一度、映像作家によってコラージュ化し、そこにドビュッシーの作品を融合する計画を進めた。会の進行は、ヴァイオリンとピアノによる、ライブでのドビュッシーの小品を演奏し、次に大型スクリーンにコラージュ化された小笠原作品を投影し、オーディオ装置によってドビュッシーの様々なジャンルの曲を付随させていくという構成を採った。なおライブ冒頭では草野のヴァイオリンとピアノの為の作品《ドビュッシーを讃えて》をここで初演した。



写真10 河西栄二彫刻展 上宮寺境内展示風景

(3) 河西彫刻展関連

通常、河西が彫刻を発表するのは美術館であり、作品そのものを鑑賞する場所だといえるが、上宮寺の空間を存分に使い、彫刻作品に空間・場所の力を加えた展示となることを目指した。門をくぐり、境内、庫裏、茶室と物語のように場面を変えて彫刻を展示することができた。

境内にある、樹齢500年の荘厳なイチョウの木の下に量感のある座像と動きのある立像など、4作品を配置した(写真10)。庫裡入口には仁王像風に2体の立像作品を設置した。庫裡の室内には大小5点の作品を置き、庭を借景とした開放的な空間を作ることができた。茶室には、小品2点を配置し、静かで落ち着く場所となった。

展示を経て改めて寺院の空間の力、魅力を感じている。作品が美術館とは違って見えるのである。展示を見た人からも「拝みたくなるから不思議なものです」という感想をもらった。河西の作品のテーマは、人間の存在感、生命感といったものが中心であるが、寺院は命に関わる場所であり作品のテーマの振幅を強める場であったと感じている。

3 成果

作曲、ヴァイオリン演奏、絵画、映像、彫刻という多様な芸術表現が寺院という特別な場で立体的に重なり一体のアートを作り出したことは画期的な試みだといえよう。また今回もスタッフの献身的な協力に支えられ、市民手作りの魅力的な企画が成功した。

4 課題

作曲・演奏や映像の内容やレベルには非常に高い評価を得ることができた。しかし、会場計画や進行など万全の準備を進めて臨んだが、突然の雨や予想を大幅に超えた来場者の座席確保の対応に追われることもあった。

今回の発表には、送り手から受け手までに様々なファクターがあり、その間の伝達が必ずしも十全であったとは言えなかった¹⁶⁾。

絵画の原作者の想念や、映像作家の解釈、及びその技術等、そして音楽とのシンクロ性、さらには会場のスペースの問題等、実践を行うことでわかった改善の余地が多々残されたことは事実であった。ただ、この試み自体の発想は美術と音楽の融合の原点ともいえ、今後も継続させたいと考える。

(IV-1 奥村・小笠原, 2 (1) 小笠原, 2 (2) 草野, 2 (3) 河西, 3 小笠原・草野・河西, 4 河西・草野)

V 実践4

「第4回岐阜アートフォーラム～時空の住処～響きあう心 金谷昌治チェロコンサート」

1 概要

2012年10月14日(日) 15:30~17:30

会場：岐阜東別院・本堂 コンサート出演・担

当：チェロ演奏・金谷昌治, ピアノ伴奏・谷峰子, 作曲・構成・草野次郎,

司会・高橋かずえ,

主催：岐阜アートフォーラム実行委員会,

後援：岐阜市教育委員会・寺院を活かしたまちづくり推進協議会,

企画・衣笠文彦

2012年8月25日(土) 10:00~15:00

会場：上宮寺(境内) 絵画制作・指導, 佐部利典彦¹⁷⁾・二村元子¹⁸⁾

2012年9月15日(土) 10:00~12:00

会場：上宮寺

作詞の披露・歌唱指導・草野次郎・守山繭子¹⁹⁾



写真11 第4回ポスター

(1) はじめに

2011年3月11日に東日本大震災があった。この大災害において芸術家は何か出来るのか、何をすべきなのか、アートフォーラム企画者は自問自答しつつ今回に至った。2012年3月、企画構想にあたり衣笠、小笠原、草野、林進一²⁰⁾が震災後の東北を訪れた。現地の空気を肌で感じつつ、福島で金谷と合流し、計画を進めた。また、佐部利も2012年4月、5月に被災地東北で、アートのワークショップ、作品展示、ヴァイオリンとギターのミニコンサートを行った。

第4回目となる本実践は、子ども達による絵画のワークショップとオリジナル曲の制作、及



写真12 コンサート風景

びそれらの曲を含むコンサート（写真12）により構成される。特にワークショップでは、子ども達が存分に体全体を使い活動できることに主眼をおいた。

被災地から岐阜に転居している子どもも、岐阜やその周辺に居住する子どもも一緒になって、まずは感覚と身体を解放し、思い切り表現できる内容を考え、大きな画面にドリッピングやローラーなどで表現し、次に、一人で自分の世界を表現できる個人での制作を行った。完成した作品は、コンサートの舞台装置として展示した。

音楽コンサートでは、会場を真宗大谷派岐阜東別院に移し、東北の民謡を題材として草野により作曲された曲などを、チェロ・金谷昌治、ピアノ・谷峰子が演奏した。また、被災地を思い浮かべながら作曲した旋律に、被災地から避難してきた子どもを含む、ワークショップに参加した子どもたちが歌詞をつけ、地元合唱団が兵庫教育大学大学院生の守山繭子と共に歌った。

2 考察

（1）絵画ワークショップと舞台づくり

佐部利は、被災地では物資やインフラがある程度整ってくると、次に被災者への「心の栄養」、つまり日々を豊かに暮らすための文化的な活動等が必要になるであろうと考えた。実際に東北でのアートワークショップ、作品展示、ミニコンサート等の活動を通して、アートが心に栄養を運ぶことができると実感し、岐阜でも東北に関わりをもちながらできるプログラムを考えた。

午前の部では、4.5m×9mの和紙の大画面を上宮寺の境内いっばいに広げ、制作を行った（写真13）。草野が東北を思いながら制作した曲をきっかけにして、音楽を流しながら活動した。

午前の部では子どもたちの協同による制作を行った。はじめに、マスキングテープをちぎって画面に貼り付け、思い思いのかたちを作っていた。家やハート、星など、比較的具体的なイメージが、ちぎったり貼ったりしながら制作されていった。その後、水彩絵の具の溶液をドレッシングの容器を使ってドリッピングしたり、ローラー、手、足に直接絵の具を付けてペインティングを行ったりした。制作時間の経過と共に

に、友達がテープを貼った部分や色をつけた部分を意識しながら制作する姿がみられた。

午後の部では、個人での制作を4.5m×0.9mの和紙に行った。自分の現在の「気になるかたち」の型紙を画用紙でつくり、その型を和紙に写し取っていくことをきっかけにして自分の表現に没頭する姿がみられた。

4.5m×9mの大作が1点と4.5m×0.9mの個人作品25枚が完成し、これをコンサート会場である東別院の本堂に舞台装置として設置した。個人の作品を舞台の両袖に設置し、大作はコンサート中に天井から降りてきて、裏からライトアップをするという演出を行った。



写真13 絵画ワークショップの様子

（2）音楽関連、作詞、演奏会

被災地東北をテーマに音楽を担当する草野は、まずオリジナル曲を書きその追悼の念を表すことを考えたが、それは自らの想いを一方的に発信するのみで作曲者としては満足するものではなかった。そして熟考した結果、やはり初の試みとして、被災した子どもやそれ以外の子どもたちに作曲者が書いた歌詞のない旋律へ、自由な想いを歌詞にして歌曲として完成し、それを全員で歌い上げるという企画を立ち上げた。ただ、参加する子どもの年齢層の幅を考慮して、小学校中学年（3、4年生）以上の子どもたちを対象に、旋律が書かれてある楽譜に歌詞を書き込んでもらうこととした。結果、3人の子どもが感動的な歌詞を書き上げ、それを1番から3番までの歌詞²¹⁾として草野が整えてアートフォーラムで聴衆と共に歌い上げた。

今回も演奏会として、金谷昌治チェロコンサー

トを軸として進め、その中ではチェロの名曲小品とともに草野の編曲《この想ひ、届け東の空に》(東北民謡3曲)がチェロとピアノの為に改訂版で初演された。

金谷の企画によるコンサートで完成した歌曲を披露するにあたり、作詞に携わった子どもが歌うことが期待された。しかし、ワークショップに参加した子どもたちには、練習の時間や場所、指導の問題があり、岐阜市の岐阜少年少女合唱団、大垣市のNPO法人リトミックGIFUに急遽依頼した。前日や当日に、守山により、歌唱指導が行われた(写真14)。当日は、総勢25人程の子どもたちが参加し、これまでにない年齢層の表現者とのコラボレーションが実現した。



写真14 歌唱練習の様子

3 成果

(1) 絵画ワークショップ

初対面の子も達が多くの子も同士の関わり合いのできる場面をいかにつくるかを課題とし、ワークショップの進行を考えた。出来上がった作品からは、友達の着色した部分や、貼り付けたテープのことを気かけながらの共同制作と、自分の表現に没頭することができた個人制作において、共に企画者がねらっていた成果を得たといえる。

(2) 心の響き合い、社会との関わり

今回のアートフォーラムは「響きあう心」をテーマとした。この言葉は、音楽として単に作品や演奏の音が響き合うのではなく、大震災の被災者を含めた人と人との心の通い合い、つまり心の響き合いを中心軸に置いた音楽の発信と

して、子どもたちとの共作の形で歌を作り合唱したことは意義深いことだったと感じる。美術作品も音楽作品も、芸術作品として社会との関わり方の重要な一面を示し得た会であったと考える。

当日合唱のリハーサルに参加するため、子どもたちは、早めに会場入りした。その後、開場までの時間、本堂の広い空間で、自主的に遊び始めた。歌だけではなく遊びを通して、自然と他者とのかかわりを持ち、つながり合う子どもの姿から、逆に大人の私たちが人と人との絆の成り立ちや取り巻く環境とのつながり方を教えられた。

4 課題

まず、企画の段階で、芸術が震災をどのように捉え、関わるかということが問題になっていた。

絵画ワークショップ終了後にもかかわらず参加の問い合わせがあった。加えて、絵画ワークショップに参加した子どもたちすべてにコンサートへの出演を依頼したかったが、とりまとめきれない場面があったことから、広報のあり方に課題が残る。また、一つのショーとしてのコンサート全体の演出についてまだ工夫の余地があると考えられる。

結果的には、コンサートは大変好評に終わったが、被災者への配慮を細部まで徹底できず、マスメディアへの対応方法などに課題を残し、今後の企画の方向性を定める大切さを学んだ。V-1, 2 (1), 3 (1), 4, 佐部利, 2 (2), 草野, 3 (2), 草野, 二村

VI 実践5

地域への広がり事例報告

「お寺でアート!?来て!!着て!?聴いて♪
遊んでチャチャチャ」

染色ワークショップとラテン音楽ライブ

1 概要

実施日：2011年7月25日(月)・26日(火)、
会場：真宗大谷派岐阜東別院(岐阜市鶯谷)、
主催：真宗大谷派岐阜地区児童教化連盟、
指導者：堀祥子²²⁾(造形指導)、日野志穂(ピアニスト、打楽器作り指導)、岐阜アートフォーラ

ムのメンバーを中心とした美術作家と教員経験者、地域住民からの有志10人

記録者：宮下十有（椋山女学園大学）

（1）はじめに

本実践は、夏休みを利用した寺院における子ども達への宿泊研修会において、Tシャツ染めと打楽器作り、ラテン音楽コンサートの活動を実施したものである。

「染め」は、美術教育における題材の一つであり、Tシャツ染めでは、伝統工芸技法のろうけつ染めと、絵画技法のドロッピングなどのモダンテクニックを融合した手法を用いた。対象は小学校3年生から6年生までの63人と、堀と共に実践を運営する、主催者団体の20歳代から30歳代の青年男女32人である。

打楽器作りの講座は、竹や空き缶などのリサイクル材を利用した製作を行い、ラテン音楽コンサートでは、寺院本堂において地元出身の音楽家たちと共に子ども達も手作りの楽器を演奏し参加することで、Tシャツや楽器などの制作物の鑑賞の機会とした。なお、本稿ではアートフォーラムと本実践の関連性に着眼し、考察を加えていくこととする。実施詳細については拙稿²³⁾を参照して頂きたい。



写真15 活動の様子
主催者側が編集した資料より抜粋

（2）本実践の題材観

日本における染めの歴史は古く、天平時代には既に藍染めの技法が仏教と共に伝わり、正倉

院に敷物などが残されている。また、政治的な身分や宗教的な階級を着衣の色で区分する時代もあるなどから、本実践の会場となった岐阜東別院を含む歴史的寺院空間の中で、染めるという行為を地域の子どもの大人が取り扱うことは、自国の文化を理解する上で有効であると考えた。

美術教育の観点からは、古くから伝わる染め技法に、学校教育で取り扱われる絵画技法を取り入れることで、現代に生きる子どもたちが親しみ易さを持つと考えた。

音楽コンサートの設定については、ラテン圏の音楽派生の歴史背景が、コミュニティ全員参加で死者を弔うために空き缶や調理器具などの身近な道具を打ち鳴らしリズムを作り上げていくことに端を発していることから、これと同じく人間の生涯の節目において経典に節をつけて読み上げる日本の寺院の役割と類似していると考え、他国の文化を紹介しそれを体感する機会として最適と考え実験的に取り入れた。これらのことを反映させた上で、子どもに簡潔に提示するために、主催者側と協議し、実践タイトルを「お寺でアート!?!来て!!着て!?!聴いて♪遊んでチャチャチャ」に決定した。



写真16 ラテン音楽ライブの様子
子どもが染めたTシャツを着用、製作した楽器を手に参加した。

2 考察

本実践とこれまでのアートフォーラムの活動の相違点は、主催者が外部にあることである。主催者はこれまでの活動にはない新たな効果をアートフォーラムや芸術活動に期待して実践を依頼したことである。2006年の第1回から2010

年の第3回アートフォーラムの開催において、芸術表現を介した人とのかかわりの意義や良さが示されたが、本実践後のアンケートからもそれらの意義が確認でき、特にこれまでにアートフォーラム主催行事において、参加が少なかった青年層にも十分に魅力的であったことが読み取れる。

本論の冒頭でも述べたように、岐阜アートフォーラムは、社会、人、地域を対象に、アートワークショップや音楽および映像などの芸術表現をインターフェースとしてかかわりを持ち、活動を続けている。地域に根ざした文化や芸術を真の意味で育む主体として市民と協働する活動こそが、アートフォーラムの今後の指針の一つとなると考える。

3 成果

本実践では、主催者団体の青年男女をアートワークショップのスタッフとして、共に題材を選定するところから始まり、子どもへの造形指導も共に行った。これは芸術家が外に向かって芸術活動を発信する形態であったこれまでのアートフォーラムとは違った活動といえる。幾度かの打ち合わせの中でコミュニケーションを取りつつ地域の要望や意見を汲み、それに応えての提案を重ね協働することで人的交流を呼び込み、子どもたちへ還元していく仕掛けとして、この実践が機能したことは大きな成果といえる。実際に染めの活動や音楽コンサートにおいて、参加した全員が生き生きと主体的にかかわる様子が見受けられた。今後のアートフォーラムの有効な手段手法の一つとなったと考える。



写真17 参加者とその環境
実践は寺院本堂の縁側を舞台に行った。

4 今後の課題

本実践において、主催者側とアートフォーラム側のそれぞれの希望や思いが程よく重なりあうところを調整することが必要とされた。今後はどちらの側に活動の主体として協働できる体制作りと同時に、流動的な現場の状況を汲み取り、円滑なコーディネートや実践の進行を柔軟に手助けする人材すなわち、ファシリテーターの育成の必要性がある。

また、会場寺院の環境保全に対する配慮に苦心した。制作の過程で出るろうけつ染めに使用した用具や材料の処理などをどうするか、主催者側と協議を重ねて対処した。歴史的価値のある場所で活動を行う場合には万全の体制で臨みたい。(VI, 堀)

VII 実践のまとめ

1 今までの総括

アーティストは、自分の考えや、表現を世に送り出すために様々な動きを創り出す。その一つとして、共通するコンセプトや感覚をもつ者が集まり、時には場所や地域を巻き込んでより大きな「うねり」を創り出す事例もある。小笠原、衣笠の動きの中から形成された岐阜アートフォーラムも、そのような活動へと発展した事例といえよう。

最初の活動は、画廊や美術館とは異質の空間である寺院での美術作品展示の試みであった。その後、岐阜大学教育学部美術教育講座留学中であつた中国内蒙古自治区学生との関わりから、国と地域を越えた美術作品交流展へと活動は発展していく。この企画は同一の作品展を岐阜と内蒙古の双方の会場で巡回開催するものであり、若手新進作家の奥村晃史²⁴⁾をはじめ、当事者である作家や、サポートをしてくれる支援者を募ってはいたが、地域を巻き込んでのアート活動を展開していくという発想までには、この段階では至らなかった。

第1回目のアートフォーラムでは、衣笠の一日限りの個展が上宮寺で行われたが、この企画は、同時期に岐阜市内の画廊で開催された佐藤、天野の2人展初日と重なるように小笠原により

構想されたものである。この時、佐藤、天野も上宮寺へ衣笠の展覧会に訪れ、寺院での美術作品展示に魅力や斬新さを感じ、小笠原、衣笠、佐藤、天野による検討の中から上宮寺での第2回展の計画が始まった。また、音楽家の草野もこの展覧会に訪れたことによって、人がつながり、音楽と美術の関係が築かれていくことになる。こうして歴史的寺院空間を拠点とするアートフォーラムの美術文化の創出と発信という基本的な考えが定まったといえよう。

第2回目では、本堂でのコンサートが実施され、大きな反響を呼ぶこととなった。草野がこのコンサートのために木曾地方の山々や川などの自然をイメージとした曲を作曲したことで、その流域にあたる濃尾地方に立地する上宮寺で行う意味合いが強められた。同時に、佐藤、天野の2人展では平面と立体の作品群の強烈な迫力により、寺院空間はアートの舞台として非日常を体感できる緊張感のある場所となった。一方で展覧会と音楽会は相互の関係性がないままに、並列の二つの企画であったという反省から、これを次回への課題とした。

こうして美術と音楽の関連性をより考慮して進めていくこととなった第3回目では、小笠原の絵画作品を映像にして、ヴァイオリンの音色とのコラボレーションを試みた。小笠原の絵画から草野がドビュッシーの音楽を連想し、その音楽と共に映像作品が上映される企画は、美術と音楽が一体となったアートコンサートとして結実した。また境内や庫裡では河西の木彫作品展示を行った。結果、絵画を映像にするコンセプトと音楽の関係性や、全体のつながりに課題を残した。境内でのインスタレーションでは、パフォーマンスや、劇などと合わせても発展性が見出せると考える。そこで次は、全体のつながりをより意識して活動を企画することとなる。

第4回目では、福島から岐阜に転居された家族も招いて、活動を企画立案することとなった。音楽は福島を拠点に活動している金谷に決まる。東北支援ということの大前提にするのではなく、アートの本質でその問題に関わっていくことを確認した。草野が福島を思って作った曲をきっかけに絵画の制作を子ども達と行い、それをコ

ンサートの舞台装置として使う。震災復興という一つのテーマをもとに、ひとつひとつの活動がつながりを持った事例となった。加えて、地域と一体となり行った活動の事例として、VI章で紹介したTシャツ染めワークショップが挙げられる。これはアートフォーラム主催ではなく地域の団体が主催となり、そこにアートフォーラム側から企画を提案し、主催者と共に立案から実践を行った事例であった。美術教育的に、学校の中だけにとどまらない地域社会での教育のあり方や、そこでのアートフォーラムの関わり方など、今後の活動の方針のひな形の一つとなったといえる。

2 今後の課題

今後、この活動の規模を広げ、つながりを増やしていくためには、組織的な企画提案や集客を行う必要がある。また、活動を支えるボランティアへ活動の趣旨や内容の十分な説明と協力を効率的に行うために、現状の実行委員会の人的充実をはかり、実働的な組織に発展させる必要がある。

これまでの活動で特に感じたのは、広報の難しさであった。情報を集約し、発信していく広報係においては、活動の拠点となる岐阜市近郊の広報誌への依頼、専用のホームページの開設、関連するメンバー個人の活動もリンクさせるソーシャルメディアでの双方向的な情報の発信も考えられる。とはいえ、関わった人、参加した人の口頭による伝承もメディアのひとつである。活動を続けていることを、地道に発信することが求められている。

また、現在の活動資金の内訳は、公的補助や協賛金、コンサートの入場料である。しかし、社会情勢によって常に安定しないのが実情である。今後、より安定した活動を行っていくうえで、小作品のオークションを行うなど、自己資金を生み出していく方策を講じると同時に、行政機関や地元企業、有志に活動の意義を継続的にアピールしていくことが望まれる。

また、企画によっては、地元の保育施設や保育士などと連携し、託児機能を設け、子育て世代がゆっくり鑑賞できるように、保育士が子ど

もを預かることができる環境づくりも重要である。こうした環境を模索するためにも渉外係が必要となる。

3 今後の展望

寺子屋的なイメージの活動を取り入れることで、地域とのつながりをより密接に持ち、企画の大小を問わず日常的に様々な実践を行うことができると思う。岐阜の風土をいかした、川遊びや山遊びなど、自然の中でのものづくりをする体験や、お寺に宿泊しながら活動するアートキャンプなどの活動を考えていきたい。

また、企画者を交代していくことで多種多様な活動が提案されると考える。地元の大学生の中から企画者を登用したり、話し合いの中から新たな企画が出たら、内部のメンバーに限らず、外部の芸術家や活動団体などからも適した講師を招聘したりしていくことが必要である。

アートフォーラムの企画の特徴である音楽と美術の関連性や、今後の更なる総合芸術としての高まりを考えたとき、全体的な演出の質を高めていく必要がある。そのために舞台装置や進行、出演者の調整など演出を深めていく手段について、関わる全員で熟議していく。ステージマネージャーによる全体の進行の把握も不可欠である。

これまでの活動を通じて、多彩な芸術活動を行う者とのネットワークが築かれつつある。地域の複数の寺院をアートフォーラムの会場として連携しそれぞれに企画者を立てるなど、実験的なことも実施することが可能である。従来の音楽と美術の総合的芸術活動はもちろん、美術作品展示や音楽ライブ、映像インスタレーションや舞踏、パフォーマンスなど内容を豊富にしていくことで、越後妻有トリエンナーレや瀬戸内国際芸術祭、直島アートサイトのように、その地域独特の景色の中で展開されるアートフェスティバルを岐阜の歴史的寺院群で開催することも可能であろう。

芸術による地域社会への貢献が期待出来るこうした実践を、今後は是非実現させていきたい。

(VII, 佐部利)

VIII 本論まとめ

岐阜アートフォーラムの最新の活動である第4回目では、それまでの活動の課題を反映し、改善されたものとなった。東北大震災や福島原発に関わる問題について、現地を思いやり、アートでできることを考えながら、地域に向けた美術文化の創出と発信が出来た意義は大きい。

企画立案から実現に向けて、関係者の意見の広聴や、それを活動に反映させるための検討時間の物理的不足を感じたが、今後はさらに熟議することで、アートフォーラムとそこにかかわる地域の人的ネットワークがより主体的に活動に参加し、その双方向のコミュニケーションの中で企画、運営し、総合的に芸術活動を行っていくことができる可能性があると思う。

また祈りの空間である寺院は、物故者への追悼に加え、活動の舞台において新たな未来への希望を託す場としての機能を発揮した。地域社会の中心的存在としての寺院は、現代社会においてもなお、大人から子どもまで一般的な市民にも親しみ深く心地よい空間として、冠婚葬祭にとどまらない活用方法を広く地域に知らしめることが出来たと考える。

そして、2012年11月には、一連の岐阜アートフォーラムの活動に対して、まちづくりに貢献したとして岐阜市より市民参画賞の表彰を受けた。

岐阜新聞記者の林進一は岐阜アートフォーラムについて次のように述べている。

《アート（芸術）は個人、さらに時間と空間を超える力がある。アーティスト、鑑賞者の二分法を超えてアート本来の特性に立ち返るのが「岐阜アートフォーラム」の魅力、活動ではないかと思う。美術、音楽、映像、さらには被災者との交流。越境し、壁を破り続けることを柔らかな心と自然な形で成し遂げ、そこに見出す発見や喜び。取材者であり、時にスタッフ同様でもあった10年余の「付かず離れず」の関わりの理由もそれに重なる》

取材者（新聞記者）の立場から、実行委員会とは一定の距離を保ち、関わりを続ける林の言葉には、岐阜アートフォーラムのこれまでの確かな成果が記されているのではないだろうか。

以上、寺院空間における美術文化の創出と発

信というテーマに基づき考察を行った。アートを手掛かりにした精神、感性の拡張と凝縮、人々との交流、というアートフォーラムの特徴を確認し、本実践の報告とする。

(Ⅷ, 佐部利, 二村, 堀)

註

- 1) 衣笠文彦(きぬがさふみひこ) 岐阜聖徳学園大学短期大学部非常勤講師, 1954年岐阜市生まれ。1979年愛知県芸術大学美術学部彫刻科卒業, アメリカ, メキシコを始め中国, イタリアなど世界各地に旅行, 滞在, 中部総合美術展など企画展, 2006年ローマなど個展多数開催。屋外彫刻モニュメント多数設置。
- 2) 上宮寺(じょうぐうじ) 岐阜市大門町の仏教寺院。
- 3) 小笠原宣(おがさわらのぶ) 上宮寺住職 画家, 1952年岐阜市生まれ。1974年京都・大谷大学真宗学科卒業(在学中下村良之介に師事), 1983年岐阜県美術館開館記念展で洋画部門賞, 1984年第27回安井賞展で安井賞受賞, 2000年コペンハーゲン, 2010年リトアニアなどで個展多数開催。
- 4) 草野次郎(くさのじろう) 兵庫教育大学大学院教授, 1955年京都市生まれ。1979年愛知県立芸術大学大学院作曲専攻修了, 作曲を石井敏, 保科洋の両氏に師事, 1990年文部省在外研究員としてミュンヘン音楽大学のD・アッカー教授のクラスで研鑽をつむ。1996年朝日賞など受賞多数。
- 5) 各回の実行委員・スタッフは, 以下の通りである。

第2回アートフォーラム実行委員・スタッフ

奥村晃史, 小笠原宣, 小笠原まや, 衣笠文彦, 佐藤昌宏, 佐部利典彦, 林紕さ子, 二村元子, 星屋和子, 堀祥子, 吉田侑記子, 神谷まさ子, 草野次郎, 松井善真, 柳瀬とよ子, 小笠原人, 小笠原知佳, 小笠原保, 長屋恵梨,

第3回アートフォーラム実行委員・スタッフ

板垣正雄, 奥村晃史, 川島安弓美, 神谷まさ子, 河田光子, 河西栄二, 衣笠文彦, 草野次郎, 佐藤昌宏, 佐部利典彦, 波多野有紀, 林紕さ子, 二村元子, 星屋和子, 堀祥子, 松井善真, 村中優, 柳瀬とよ子, 吉田侑記子, 渡辺康男, 小笠原宣, 小笠原まや, 小笠原人, 小笠原知佳, 小笠原保, 長屋恵梨, 加藤みゆき, 中切真由美, 宇佐美直子, 大澤雅子

第4回アートフォーラム実行委員・スタッフ

小笠原宣, 佐部利典彦, 衣笠文彦, 草野次郎, 二村元子, 林紕さ子, 高橋和江, 小森真人, 神谷まさ子, 高松秀進, 澤田健司, 吉田侑記子, 堀祥子, 河西栄二, 佐藤昌宏, 奥村晃史, 豊田(水無月), 柳瀬とよ子, 宇佐美直子, 松井善真, 小笠原まや, 小笠原人, 小笠原知佳, 小笠原保, 小笠原恵梨, 川島安弓美, 岡本朋子, 大森美瑠, 土谷実来,

「来て着て聴いてお寺でチャチャチャ」Tシャツ染色ワークショップ実行委員・スタッフ

- 堀祥子, 藪下真弥, 小笠原宣, 佐部利典彦, 衣笠文彦, 二村元子, 林紕さ子, 澤田健司, 岡本朋子, 小鹿真以子(造形指導), 宮下十有(記録) 日野志穂, Los EsTudiantes de HABANA SECRETA(楽器製作指導, ライブ実施), 松岡恵, 巖城浩人, 楠智広, 豊島秀龍, 小笠原人, 小笠原智佳, 吉田慧, 小林宣正, 黒田真教, 杜多陽子, 川出美沙子, 小川義浄, 藤井勇一, 岩越智俊, 河野篤, 小林ひろみ, 小笠原まや(岐阜教務所児童教化連盟)
- 6) 2003年5月13日~18日 岐阜県美術館 同年 国立内蒙古美術館でも開催
 - 7) 金谷昌治(かなやまさはる) 福島大学人間発達文化学類教授, 東京ハルモニア室内オーケストラ団員, カメラータ・セシリア主宰, 1980年東京芸術大学大学院修了, 2000年東京ハルモニア室内オーケストラ・チェココンサートツアー2000など公演多数。
 - 8) 谷峰子(たにみねこ) 全日本ピアノ指導者協会正会員。愛知県立芸術大学大学院修了。「日本演奏連盟オーディション」に合格し名古屋フィルハーモニー交響楽団等と協演。また神戸合奏団チェンバリストとしても活躍。ピアノを故オスカー・ケベルらに師事。東京藝術大学弦楽科助手, 愛知県立芸術大学音楽学部講師など歴任。
 - 9) 天野裕夫(あまのひろお) 女子美術大学工芸科非常勤講師, 多摩美術大学工芸学科客員教授, 1954年岐阜県瑞浪市生まれ。多摩美術大学彫刻科卒業, 1984年高村光太郎大賞展彫刻の森美術館賞, 2004年円空大賞岐阜県知事賞など受賞多数。
 - 10) 佐藤昌宏(さとうまさひろ) 岐阜大学教育学部美術教育講座教授, 1954年岐阜市生まれ。1980年東京芸術大学大学院美術研究科(油画)修了, 浅井忠記念賞展, 安井賞展, セントラル86, 87, 中日展など多数の企画展, コンクールや個展を多数開催, 岐阜県文化活動等特別奨励賞受賞。
 - 11) 波多野有紀(はたのゆき) 岐阜市生まれ。桐朋学園女子高等学校音楽科(共学)を経て, 桐朋学園大学卒業, 同大学研究科修了, 2003年~2005年

ハンガリーのリスト音楽院に留学、現在は後進の指導及びソロ、オーケストラの客演などで活動している。

- 12) 廣田俊治（ひろたとしはる）岐阜県高山市生まれ。国立音楽大学附属高等学校音楽科卒業後、ハンガリー国立リスト音楽院大学大学院修了、2006年からはドイツ、ハノーファー音楽演劇大学リストコースで研鑽を積み、2009年ドイツ国家演奏家資格取得
- 13) 杉山弦（すぎやまげん）1986年生まれ。2009年京都嵯峨芸術大学卒業、2010年3月GifuART CAMP2010（岐阜シティ・タワー43）「灯」を展示、2010年IAMMAS（情報科学芸術大学院大学）にて人としての自我の形勢をテーマに映像やインスタレーション作品を展開
- 14) 河西栄二（かさいえいじ）岐阜大学教育学部美術教育講座准教授、1966年山梨県生まれ。1995年筑波大学大学院芸術研究科修了、1995年より新制作展出品（以後毎年）2003、2006年新制作展新作家賞受賞、2007年新制作協会会員推挙、2004年第38回現代美術選抜展（文化庁主催）。
- 15) 音楽作品において、古典派あたりまでは「音色」の概念はあくまで構成全体の中で一つの「変化」であり、それ自体が要素、あるいは動機としての機能性はあまり重要視されていなかった。しかしロマン派以降、「音色」という概念それ自体が内容的な意味に近づいて（絶対音楽から表題・描写音楽に表現的視野が広がったことが一つの理由）、ドビュッシーのフランス近代の印象派に至っては、特にこの「音色」というものが完全に重要なパラメータとなっている。「音色パレット」という言葉は、様々な音色による表現手段、表現ツールとして「音色」が作品の中で使用され機能していると言う意味である。
- 16) 本文中の「ファクター」とは、次のような内容を指す。最初に草野が小笠原の絵画から受けるイメージ、そして次にそのイメージと草野の中にある音楽的イメージの近似性（今回はドビュッシー）、さらにはドビュッシー作品と小笠原各作品とのさらなる具体的近似性（例、ドビュッシーの曲「沈める寺」と小笠原の絵画「ローマ 京都の落日」）、等々。この小笠原作品と草野とドビュッシー作品の間に既にこれだけのファクターがある。さらに映像作家にその意図を伝達し、解釈して各作品の映像を作成していく段階でまたいくつかのファクターがある（この部分がある意味で重要）。そして最終的に本番で聴衆に届くまでにも、演奏会全体

の構成や映写やオーディオ機器の状態、座席の状態等考慮に入れると、最初の段階から最終的な聴衆に届くまでにはあまりにも多くの変数があり、その多くのファクターを通して今回の企画が完全に伝わったのかということ、十全ではなかったと考える。

- 17) 佐部利典彦（さぶりのりひこ）画家、1969年岐阜県生まれ。1992年岐阜大学教育学部美術工芸科卒業、1994年愛知教育大学大学院修了、伊藤廉賞展などコンクール出品、個展開催。岐阜県内、横浜、震災後の東北などで、子ども達や障がいをもつ人と活動を行う。また、カナリヤ諸島、スロベニア 中国張家界など海外で制作、ワークショップを行う。
- 18) 二村元子（ふたむらもとこ）彫刻家、1973年岐阜県生まれ。1996年 岐阜大学教育学部美術教育講座卒業、1999年同大学院美術教育専修修了、2004年アートスペースCitta（各務原）、2008年アクティブG（岐阜市）など個展多数開催。障がいを持つ人とのグループ展なども行っている。
- 19) 守山繭子（もりやままゆこ）兵庫教育大学大学院に在籍。兵庫教育大学芸術系コースを卒業。音楽を保坂博光に師事。平成23年第8回兵庫教育大学芸術系コース演奏会（「蝶々夫人」より”ある晴れた日に”）、平成24年、茨城新作音楽展（新作歌曲「いつまでも、いつまでも」）などに出演。
- 20) 林進一（はやししんいち）岐阜新聞記者（元文化部長・論説委員）1950年、大垣市（旧不破郡赤坂町）生まれ。74年岐阜新聞入社。文化部時よりアーティスト取材などが縁で、内モンゴル自治区、東日本大震災被災地に同行取材。
- 21) 「みんながいれば」作曲：草野次郎、
作詞：佐藤風花、四宮愛榛、後藤咲来
- あめあがりのそらを にじがかかっている
あめあがりのそらを そらをにじがかかっている
ことりがとんでいる ことりがとんでいる
おひさまのひかりが さしこんでいる
まわりのふうけいは やまにかこまれて
トランペットがおかでなっている
 - あおくひろがるだいち きみはとびたつんだ
ゆめときぼうをのせて みらいへとはして
ゆけ
きみならできると きみにはできると

みんなでちからを あわせあわせとべよ
いまひかるときよ いまみらいにはしる
きっとみらいは すばらしいだろう

3. みんなみんないれば みんなみんないれば
みんながんばれるよ がんばれるがんばれるよ
たとえさみしくとも たとえさみしくとも
みんながいるから だいじょうぶだよ
みんながいるから だいじょうぶだよ
みんながいるから だいじょうぶだよ
- 22) 堀祥子（ほりさちこ）名古屋女子大学文学部講師，1974年岐阜市生まれ。1997年多摩美術大学彫刻科卒業，2010年岐阜大学教育学研究科美術専修修了。テラコッタ制作を中心に岐阜県展，岐阜市展等で受賞多数。子どもにとって優しくあたたかみのある造形素材や教材の開発研究・実践を行っている。
- 23) 堀祥子（2011）：美術教育における「染め」の実践的研究Ⅰ－異学年の集団における地域実践を通して 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター 紀要第11号，125～134
- 24) 奥村晃史（おくむらあきふみ）画家，1972年各務原市生まれ。1994岐阜大学教育学部美術工芸科卒業，1997年福井大学大学院教育学研究科美術専修修了，2008年世界絵画大賞展優秀賞，2008年損保ジャパン美術財団選抜奨励展，2009年クロスアート2（岐阜県美術館）など企画展，個展多数開催。

写真出典

- 写真1・2 衣笠文彦撮影
写真3 第2回ポスター 制作 神谷まさ子
写真4・6 佐藤昌宏撮影
写真5・8 草野次郎撮影
写真7 第3回ポスター 制作 神谷まさ子
原画 小笠原宣
写真9 小笠原宣撮影
写真10 2010年9月29日岐阜新聞朝刊，
小森孝美 撮影
写真11 第4回ポスター 制作 神谷まさ子
原画 小笠原宣
写真12・13・14 佐部利典彦撮影
写真15・16・17 宮下十有撮影

